

ボランティアが支える仙台国際音楽コンクール 第9回仙台国際音楽コンクールボランティア活動報告

2025年5月24日(土)に開幕する「第9回仙台国際音楽コンクール」。国内外から来仙される多くの出場者、審査委員、来場者への対応、会場案内などの活動でコンクールを陰ながら支えるボランティアの活動説明会が6月21日(金)、22日(土)の二日間、日立システムズホール仙台で開催されました。会場運営サポート、広報宣伝サポート、出場者サポート、ホームステイ受入れ、4つのボランティア部門毎に紹介ブースが設置され、来場者は各ボランティアブースを回りながら説明を受けたり質問をされたりしました。7月31日(水)締切での新規登録者は104名となりました。

部門	新規登録者数
会場運営サポート部門	48
広報宣伝サポート部門	13
出場者サポート部門	16
ホームステイ受入れ部門	27
合計	104

各ボランティアは、8月から顔合わせ新人研修会が順次開催、来年5月の本番向けにさっそく始動。会場運営サポート部門は期間中、円滑な運営に欠かせない、お客様を会場にお迎えする役目があります。経験のあるボランティアによるロールプレイングやレクチャーが行われました。出場者サポート部門は出場者の公式練習会場の運営サポートや市民からの応援メッセージの翻訳、日本文化を紹介する「交流サロン」運営等を実施します。ホームステイ受入れ部門は出場を終えた出場者のホストファミリーを務めます。6年ぶりの実施となり、受入れまでのスケジュール確認などが行われました。



会場運営のロールプレイング

広報宣伝サポート部門の初回ミーティングは8月24日(土)に開催されました。

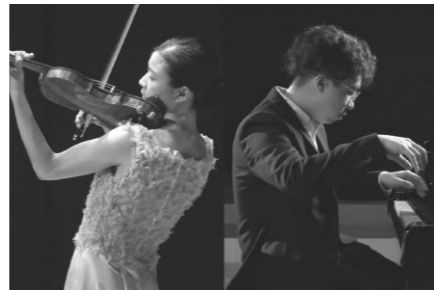
自己紹介では、継続者から、継続年数や、広報誌「コンチェルト」、ブログ作成など開催期間以外にも継続的な活動が出来ることや、SNS、ブログなど自分が関わった制作物が記録に残るといった広報宣伝ならではの魅力について語られました。新規登録者からは文章を書くのが得意、写真撮影が得意、仕事をリタイアしたので身に付けたスキルを活かしたい、また学生からは将来仕事に必要とされる記事執筆スキルを磨きたいなど申込動機が紹介されました。顔合わせ後、コンチェルトの編集会議も行われ、本紙に掲載されている第1回仙台国際音楽コンクールピアノ部門優勝者で前回審査委員でもあるジュゼッペ・アンダローロさん、仙台フィルハーモニー管弦楽団メンバーへのインタビューには、4名の新規登録者がトライしました。

第9回仙台国際音楽コンクール開催記念コンサート ～優勝者による珠玉のブラームス～

第9回仙台国際音楽コンクールの開催を記念し、第8回優勝者である中野りな、ルウォ・ジャチンが本コンクールの特色である協奏曲をお届けします。世界が注目する2人による演奏で、一足先にコンクールの熱気と興奮をお楽しみください。

〈日 時〉2025年2月15日(土) 14:00開演(13:30開場)
〈会 場〉日立システムズホール仙台 コンサートホール
〈出 演〉ヴァイオリン：中野りな(第8回ヴァイオリン部門優勝)
ピアノ：ルウォ・ジャチン(第8回ピアノ部門優勝)
〈指 揮〉広上 淳一
〈管弦楽〉仙台フィルハーモニー管弦楽団
〈演奏曲目〉ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.77
ブラームス：ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 op.83

〈料 金〉S席：¥4,500 A席：¥3,500 U-25(公演当日25歳以下)：¥1,500
プレイガイド=仙台市民文化事業団 [WEB] <https://ssbj.jp> [電話] 022-727-1875 (平日9:30~17:00)
[窓口] 日立システムズホール仙台、仙台銀行ホール イズミティ21
藤崎、チケットぴあ(Pコード：274-992)、ローソンチケット(Lコード：22200)、イープラス



中野りな ルウォ・ジャチン

♪新規メンバー編集後記♪

「練習して食べて練習して寝て起きてまた練習。その繰り返しです。」新規団員の方へのインタビューで心に残った一言です。素晴らしい演奏には特別な魔法も近道もなく、地道な積み重ねがあるのみなのですね。ドラマの影響で勢いテキストを購入した韓国語も頓挫。何事も続かない私はただただ反省するばかり。(三)

「コンチェルト」は以前からよく読んでいて、自分が編集に携わることとなり本当に嬉しいです。初仕事となったジュゼッペさんのインタビューでは、演奏にこめられた熱い情熱と同時に、彼の優しい人柄を感じる事ができ至福の時間でした。今後もしいろいろな演奏家の方の声を皆さんに伝えていけたらと思います。(官)

現役演奏家と初対面で緊張感を抱きつつも、とてもなごやかな雰囲気インタビューが進みました。こちらからの質問に対して、言葉を選び

丁寧に話される姿勢に感銘しつつ、音楽への思いとか楽器への愛着とか音楽活動のこととかを伝えていただけました。音符を正しくひとつひとつ重ねて奏できるように、それを言葉にして感じさせてくれました。音楽の才能を持った方々からのお話は我々一般人と違って専門的過ぎて……というような先入観も、いつしか消え楽しく時間と空間を共有できました。終われば楽しい時だったということ、演奏家の人間味を感じさせられました。(石)

発行：第9回仙台国際音楽コンクール 広報宣伝サポートボランティア

[コンクール公式 X (旧Twitter)] @sendai_simc [ボランティアブログ X (旧Twitter)] @simc_volblog

問合せ：仙台市民文化事業団音楽振興課(仙台国際音楽コンクール事務局) Tel: 022-727-1872 / e-mail: info@simc.jp / URL: <https://simc.jp>

SENDAI
INTERNATIONAL
MUSIC
COMPETITION
for Violin & Piano

仙台国際音楽コンクールニュース



コンチェルト
Concerto



第9回仙台国際音楽コンクール
ヴァイオリン部門：2025年5月24日(土)~6月8日(日)
ピアノ部門：2025年6月14日(土)~6月29日(日)

Vol.9-2
(2024.11.22 第9回コンクール関連 第2号)

インタビュー ジュゼッペ・アンダローロ さん

(仙台国際音楽コンクール 第1回ピアノ部門優勝、第8回ピアノ部門審査委員)

仙台クラシックフェスティバルの出演で来仙したジュゼッペ・アンダローロさんに、出場者そして審査委員両方を経験されたからこそ聞けるお話を伺うことができました。優しく柔らかな雰囲気です。スタートしたインタビューです。



ジュゼッペ・アンダローロさん

第8回のコンクールでは審査委員を務められましたが、自身が出場者として参加していた時とコンクールの印象に違いはありましたか。
出場者として参加した若い頃は、音楽の“真実”を追求していました。何が私にとってベストの音楽構成なのかを先生に相談しましたが、先生は私に自由に決めさせてくれました。唯一無二の自分だけの音楽構成に挑戦しました。そのためには作品の意味や背景を知らなければなりません。

毎日何時間も練習するだけではなく、例えば博物館に入って情報を収集したり、その時その時代の本を読んだり、芸術品を見たりして背景を理解すればより上手に弾けます。私の若い頃の勉強方法ですが、何かしらのインスピレーションを見つけ、いろんな分野における知識の習得に努めました。審査委員として感じたのは、今の若い音楽家の多くがインスピレーションやモチベーションが足りないということです。スキルは高く素晴らしいですが、何かをしたい・何か素晴らしいことをしたいという自由がないことに審査委員としては悔しい想いがあり、残念です。稀に新しいことが伝わってくる音楽家もいますが、音楽の知識や歴史の理解が不足している音楽家が多いです。音楽の背景を理解できればよりよい音楽が出来上がると思います。

審査委員をされた時、印象に残った出場者はいましたか？

太田糸音さん(日本)やヨナス・アウミラーさん(ドイツ)が私は印象に残っています。特に太田さんはとても惹かれる演奏をされていましたね。演奏する曲によっても違いはありましたが、みなさんそれぞれ個性があって良かったと思います。曲によって表現が違えども、それぞれの個性がその人らしく上手に発揮できていて素晴らしいかったです。同じ奏者でも、予選と本選の演奏に違いや差が出ることもあるのだなと感じたコンクールでもありました。同時に、私自身もやはりこういう“審査”というものはかなり難しいものと感じ勉強になりました。

影響を受けたピアニストを教えてください。

様々なピアニストに影響を受けています。私の恩師セルジオ・フィオレンティーノ先生は天才でした。残念ながら私が16歳

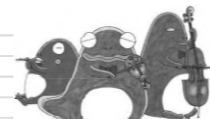
の時に亡くなりましたが、彼に大きな影響を受け、とても尊敬しています。また、ラフマニノフは私にとって最高のピアニストです。他にもリヒテル、ホロヴィッツ、ギーゼキングなどがいます。彼らも私にとって最高のピアニストでした。アルゲリッチ、ポリーニなども素晴らしいです。彼らは若い頃から素晴らしいかったです。また、コルトーも私のインスピレーションを生むピアニストの一人でした。

もしピアノに出会わなければ何をしていたと思いますか。
私は物理学など科学全般に興味があり、科学者になるのもいいかなと思っていました。また、父が小さいころ地理の本を与えてくれた影響で、今でも地理に対する興味が続いています。さらに、食べ物や料理が好きなので、もし音楽家という仕事につくことができなかつたら、レストランを開いていたかもしれません。

様々な国で演奏されていると思いますが、国や地域によって工夫することはありますか。
以前は演奏する国によって関連する作曲家のものに曲目を変えていましたが、今はあまり意識せず自由に曲を選んでいきます。コンサートの運営側からはかなり前の時期に曲を決めてほしいと言われるのですが、ソコのリサイタルではそれは結構難しく、ギリギリの時点で自分が感じているものに従って選曲したいという想いがあります。「自由にやってください」と言われたのですが、特にクラシック界では難しいものがあります。改善していきたいと思っています。

前回コンクールのマスタークラスではショパンの「舟歌」のレッスンを担当されましたが、実際に演奏して下さり豊かな感情がこもっていてとても感銘を受けました。
私は、言葉ではなく“音に基づいて教えなくてはいけません”と思っています。英語が上手に話せたとしても、音によって会話しなくてはいけません。音と時間の組み合わせが大切です。実際に弾くことによって、相手に直接伝えることができ、理解してもらうことができます。私の恩師のフィオレンティーノ先生は口数が少ない先生で、実際に演奏することで教えてくれたので、私もそれに倣っているところがあります。

一真摯に音楽に日々向き合う様子や、音楽家を志す皆さんに惜しみなくアドバイスくださるような心のごもったお話を伺えました。コンクール優勝をきっかけに日本での演奏機会が増え、今回の来日はおそらく31回目とのことでした。アンダローロさんの素敵な音楽を聴ける次の来日が楽しみです。

仙台フィル マスコットキャラクター
(C)MIKIO IGARASHI/S.P.O

今回は令和4年度以降に仙台フィルに入団された、首席ファゴット奏者の西口真央さん、首席トロンボーン奏者の紺野駿人さん、コントラバス奏者の高橋慧希さんの3名にお話を伺いました。今回は特別拡大版で2ページにわたりお届けします。

仙台フィルや仙台の街の印象、他のオーケストラとの違いを感じていることなどありましたら教えてください。

西口真央さん(以下、西口)：仙台の街全体が仙台フィルを愛してくださっていると感じています。また、クラシックが大好きな街であることに驚きを感じています。毎年開催される仙台クラシックフェスティバルも、まるでラ・フォル・ジュルネ(※注1)のように、たくさんの方々が国内外から訪れ、公演数も多いのでとても素敵です。

紺野駿人さん(以下、紺野)：仙台フィルに入団して感じたことは、まず、仙台の方々の温かさです。団員の皆様もアットホームな雰囲気でお仕事をされていて、こうした環境が僕は大好きです。

高橋慧希さん(以下、高橋)：オーケストラのリハーサルは集中力が求められるため、緊張感があるオケが多いのですが、仙台フィルのリハーサルはリラックスした雰囲気があるという印象です。(紺野、西口ともに大きくうなずく)そのような雰囲気は入団当時、とても新鮮に感じました。

(※注1)ラ・フォル・ジュルネ：熱狂の日という意味。1995年、フランス西部の港町ナントで誕生したクラシック音楽祭。日本には2005年に東京に上陸し世界最大級の音楽祭に成長している。



ファゴット/西口真央さん

楽器との出会いや始めたきっかけを教えてください。

高橋：中学校の吹奏楽部で、最初の2年間打楽器を担当していました。中3になって、先輩が卒業されて弾く人がいなくなったコントラバスを引き継ぐ形で始めたのがきっかけです。子供だったので、とにかく大きな楽器をさわられるのが単純に嬉しいという気持ちと、管楽器ばかりの吹奏楽部の中で、唯一弦楽器を担当するという特別感も嬉しくて、楽しんで弾いていました。

西口：私もファゴットに出会ったのは中学校の吹奏楽部です。何の楽器をやるかと考えた時、他の人とかぶらない楽器をやってみたくて思いました。そこで誰も希望者のいなかったファゴットを選びました。昔から低い音の楽器が好きで、小学生の頃は金管バンドで、ユーフォニアムとチューバを吹いていました。ファゴットは息さえ入れられれば、大体音が出ます。そこからより良い音にしていくというプロセスが私は好きです。子供の頃は、ロングトーンでファゴットの良い音を追求していくのが楽しいと思いながら吹いていました。

紺野：僕は小学校の吹奏楽部にトランペットが吹きたくて入部しました。ところがトランペット希望者が多く、体が大きかった僕はトロンボーンを勧められたのがきっかけです。

皆さんのきっかけが吹奏楽部への入部とは奇遇ですね。では、そうした楽器との付き合い方で気を付けていることや、メンテナンスでこだわっていることがあれば教えてください。

高橋：コントラバスは木製の楽器なので、湿度と温度の管理に気を付けています。それに僕は手の汗が多い方なので、楽器と弓についた汗はとにかくこまめに拭くように心がけています。もう一つ、演奏に大きく関わる弓の毛のコンディションにもこだわっています。毛替えはもちろん定期的にしていますが、弓の毛を豚毛のブラシで丁寧にブラッシングしています。塗る松脂も温度や湿度の影響を受けるので、ベストコンディションで使えるように気を付けています。

西口：ファゴットも木製なので、温度や湿度によって膨張することもあれば収縮することもあります。一度、管と管をつなぐジョイント部分が乾燥の影響で外れてしまい、楽器の下の部分を落としてしまったことがありました。それ以来、必ず楽器は下の部分を持つようにしています。

紺野：金管楽器はそこまでデリケートではありません。ただ、金属の状態が変わると響きに影響するので、年に何度か調整は欠かせません。振動の効率を良くするために楽器を炙って調整するという方もいますが、僕は特にやっていません。また、マウスピースを曲によって換える方もいますが、僕の場合、高校生の時から楽器もマウスピースもずっと同じものを今でも使っています。

西口：ファゴットの場合、リードも演奏に大きく影響します。ファーストやセカンドといったポジションや、旋律を吹く場面など、演奏をする状況に応じてリードを換えています。また、吹き口のボーカルという部分を換えて特殊な音に対応することもあります。

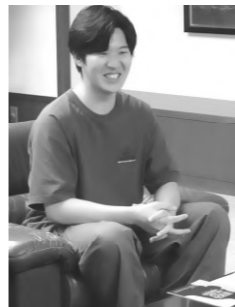
これまでコンクールやオーディションといった場で演奏する機会をお持ちだと思います。何か思い出がありましたら教えてください。

高橋：コントラバスのコンクールに出た時のことです。まず1曲目の無伴奏の曲が終わり、僕は汗っかきなので手の汗を拭いていたのですが、汗を拭き終わらないうちに、伴奏付きの2曲目の前奏をピアノの方が弾き始めてしまい、その瞬間ものすごく焦りました。なんとか弾く体制を整え、演奏できる状態になったのが曲の出だしの1小節前という実に際どいタイミングでした。今でも忘れられない経験です。

西口：私もハラハラした経験があります。コンクールでは控え室からステージに行くまでの間に、音出しの部屋など移動が多いのですが、ファゴットは部品が多い楽器のため大変です。大学生で初めて出場したコンクールでは、移動の途中で建物の外を通る所があり、一度楽器をしまったのですが、ステージ直前で部品の付け忘れに気付く、とても焦ったことがあります。何とか本番のステージに間に合ったというハラハラドキドキの経験でした。



コントラバス/高橋慧希さん



トロンボーン/紺野駿人さん

紺野：僕の場合、コンクールでやらかしたというよりは、コンクールの4日前に楽器を倒してぐちゃぐちゃにしてしまったことがあります。いつもリペアを頼んでいるのは東京の方なのですが、その時は仙台にいたので……。修理してもらえたのはなんとコンクール前日でした。その時はコンクール前日まで練習ができず、ひどい状態でコンクールに出たわけです。スベアの楽器があれば良かったのですが、当時は持っていませんでした。たまたま趣味でやっていたバストランペットで練習し、レッスンもバストランペットで受けましたが、やはりもどかしかったです。

仙台国際音楽コンクール(以下SIMC)の特徴として出場者とオーケストラとの共演がありますが、どのような印象やお考えをお持ちですか。

紺野：前回のSIMCは入団前でしたが、試用期間ということでピアノ部門のファイナルに参加しました。普段仕事で接するのは、比較的上の年代の熟練した技術を持つ方々ですが、SIMCでは若い世代のフレッシュな

出場者の方々と自分も同じグルーブ感で演奏できるのが楽しかったです。ちょっと青いな……と感じる演奏もありますが、それもまた新鮮な魅力で自分にとっても刺激になりました。

西口：私は次回のSIMCが初めてになります。ただ今年1月の仙台フィルの定期で、第1回の優勝者であるヴァイオリンのスヴェトリン・ルセフさんと共演する機会があり、とても素晴らしい演奏で感動しました。SIMCは未来の巨匠になる方々にたくさん出会える場だと思います。才能のある方々と共演できることはとても楽しみです。

高橋：他のオケでは、指揮者コンクールの共演として演奏したことがあります。誰かの人生がかかっているとか、審査にも影響するのかもしれないと思うと緊張しました。SIMCは動画配信でコンクールの様子を観たことがあり、そのレベルの高さに驚きましたし、皆さん人生を賭けて臨んでいることが伝わってきました。初めて演奏する僕自身も緊張しています。

課題曲も発表されました。曲目についての感想などがあれば教えてください。

高橋：バルトークのヴァイオリン協奏曲2番は難曲だと思います。また、ピアノ部門ファイナルの課題曲である矢代秋雄(※注2)の協奏曲は、とても良い曲なのですが、オケにとっても難しい曲だと思います。仙台フィルでも何年前かに演奏されたことがありますが、今から頑張っ準備しなくてははいけないと思っています。

西口：私にとってはショパンのピアノ協奏曲第1番が、人生で初めてオケの一員として演奏した思い出の曲です。協奏曲については演奏したことのある曲の方が少ないので、しっかりと準備をしなくてはと思っています。個人的にはシベリウスのヴァイオリン協奏曲が大変だったという思いがあるので、こちらも準備を頑張りたいと思います。

紺野：協奏曲ではトロンボーンパートがない曲もあります。ただ、リストのピアノ協奏曲1番は、トロンボーンが一人で吹くうえに、テクニックを要する曲なのでびくびくしています(笑)。シベリウスの協奏曲については、第8回の優勝者であるヴァイオリンの中野りなさんと仙台フィル定演で演奏したことがありますが、やはり難しい曲だと思います。

(※注2) 矢代秋雄：1929生～1976没。46歳の若さで急逝。ピアノ協奏曲、交響曲、チェロ協奏曲といった代表作は、日本の高名な音楽賞を受賞している。

☆紺野さんは音合わせのスケジュールのため、ここで退席となりました。引き続き西口さん、高橋さんにお話を伺います。

今後共演してみたい方はいますか。

西口：指揮者の尾高忠明さんです。私は学生の時から富山のオーケストラアカデミーで活動しており、一度だけ共演しました。ちょうど大学卒業後に新型コロナが流行してオケの練習ができなくなり、半年ぶりに再開した時に、尾高先生が練習に来てくださったんです。尾高先生が何かひとことおっしゃるだけで音が変わるのを体感し、すごいなあと思いました。ぜひまた一緒に演奏する機会があればと思います。

高橋：尾高さんは僕も大好きです。それから山田和樹さんも仙台フィルと相性がとても良いので、ぜひまた来ていただきたいと思っています。小林研一郎さんとの演奏はとてもおもしろかったので、一緒にしたいと思います。

西口：同じ曲でも指揮者によってテンポやフレーズ感が異なりますし、曲自体の解釈も全然違うこともあります。

高橋：いろいろな音楽を示してくれるので、多くの指揮者の方々との出会いは楽しみです。

練習について伺います。オーケストラで弾く曲の練習はどのようにされていますか。

西口：私は最初、楽器は持たず、楽譜とスコアを見て自分がどのパートと一緒に演奏するのかということを確認します。その後、楽器を持って音源と一緒に吹いてみます。音源はCDや動画配信を使います。カラオケの練習みたいな感じです。

オケの練習の場合は曲を通して弾いた後、できない箇所をさらうというやり方ですが、ソロ演奏の練習時は、たとえば譜面どおりのテンポでは弾かない、難しい箇所はゆっくり弾く、曲全体を通しては弾かないといったことでしょうか。それから、とにかく反復練習です。何度も何度も反復練習し、ご飯を食べて寝て忘れてまた次の日に反復練習……その繰り返しに尽きます。

高橋：僕も似たような感じです。まず曲について勉強をします。音楽を聴いてパート譜を見てスコアを見て、しっかり頭に入るまで全体をチェックします。そこまでやってから最後に楽器で練習をします。オーケストラで演奏する曲の場合は大体そんな感じです。

西口：練習を投げ出したくなることはもちろんあります。そんな時は楽器を置いて遊びに行きます。温泉とか銭湯とか、家ではない場所のお風呂に入って気分転換をしたり、ご飯を食べに行ったりします。

高橋：プロになってからの練習の仕方は学生時代とそれほど変わりはありません。大体西口さんと同じような練習の仕方だと思います。僕の場合、家で楽器を弾けないので日立システムズホール仙台に楽器を置いて練習をしています。でも休館日は練習できないため、全く楽器にさわらない日もあります。そんな時は気分を変えて家でのおんびりしています。(笑)

今回のインタビューでは、お三方から大変楽しいお話を伺うことができました。また、第9回SIMCもますます楽しみになりました。お三方の活躍を心から祈り、応援したいと思います。お忙しい中お時間を頂きありがとうございました。